

国会集団語の発展段階の分析

松田謙次郎¹

¹神戸松蔭女子学院大学

kenjiro@shoin.ac.jp

概要

国会審議に見られる集団語4語の言語的・社会的生成過程に関する分析結果を報告する。76年分の国会会議録から「テレビ入り」「総理入り」「お経読み」「つるし」を抽出しデータを分析した。言語的過程として原義⇒{ヘッジ共起, 意味転換}⇒文脈拡大の3段階が確認され、段階を経るごとに前段階の形式が追加され共存に至ることが確認された。またいずれの語も1~3の政党所属の複数議員から始まり全政党に拡散したことから、少なくとも拡散の開始は政党単位であると見做せる。従来の集団語研究に欠けていた実際の言語使用データを用いた形成・拡散過程の分析を可能にする点で、国会会議録は理想的な言語資源を提供する。

1 はじめに

特定の血縁的・地縁的でない機能的社会集団に特有な、あるいは特徴的な仲間内の通用語[1]と定義される集団語は、従来その実例収集と分類(含造語法)が研究の中心であり、データは文献資料やアンケート調査が頻用されるようである[2][3][4][5][6][7]。集団語形成の言語的・社会的側面を捉えるには、発言者、使用日時、使用文脈などに関する情報が付属した長期間にわたる大量の発話データが必要であり、従来のデータ・方法論ではこうした側面を捉えるには克服しがたい限界があるものと思われる。

本研究では、文献、先行研究、そして議員自身のメタ言語的議場発言から集団語の存在が明らかにされている[8][9][10][11][12][13][14]国会の集団語使用を国会会議録から抽出し分析することで、集団語の動的側面を捕捉・分析することを試みた。

¹ 発言情報は日付、会期、衆参別、会議名、号数、発言者の順で示した。

2 データ

分析対象とする集団語とそれぞれの集団語の意味は以下の通りである[8][9][10][11]。「つるし」については「つるす」の全活用形も抽出した。

テレビ入り: 本会議, 予算委員会, 党首討論などに, NHKの国会中継が入ること。

総理入り: 首相が委員会に出席していること。

お経読み: 本会議・委員会で行われる法案の趣旨説明において, 法案の提案理由を朗読すること。

つるし: 野党が委員会での法案審議の前に本会議での趣旨説明を求め, 委員会に付託されず審議されないこと。

各集団語の実際の使用例を以下に掲げる¹。

- 最後, 大臣, このペーパー, 四月七日の予算委員会, 実はこの予算委員会は**テレビ入り**で行われました。

[2008/4/22, 169 参厚生労働 7, 津田弥太郎]

- きょうは, **総理入り**の質疑ということで, よろしく願いいたします。

[2012/8/24, 180 衆財務金融 19, 大谷啓]

- 先日, 大臣から丁寧にゆっくりと**お経読み**をしていただきましたので, 今日は私の方からじっくりと質問をさせていただきたいと思えます。

[2002/4/15, 154 参総務 14, 高橋千秋]

- 残念ながら, 今国会におきまして, 重要法案六本まとめて**つるし**を外して当委員会に付託されて, それも二日間で審議をしろ, これは私は, 国会また当大蔵委員会の自殺行為ではないかという気がしております。

[1994/3/25, 129 衆大蔵 3, 村上誠一郎]

上記4語について、第1回国会から第212回国会の2023年11月17日開催分までの国会会議録から合計926件抽出した。「つるし」のような集団語は従来の原義で使われている場合が多いので、目視により集団語を選別しコーディングを行った。なお、「つるし」は「つるす」のすべての活用形についてもデータを抽出した。4語のデータ件数は以下の通りである。

表1 データの内訳

	テレビ入り	総理入り	お経読み	つるし
原義	0	0	5	241
集団語	208	106	108	258
合計	208	106	113	499

3 言語的發展段階

国会集団語の言語的發展段階について、松田(2021)[13]は図1のようなモデルを提案している。まず「テレビ入り」のような節から派生したと考えられる集団語、そして「つるし」のような既存名詞から派生した集団語の2つのソースから意味の逸脱・拡張が起きて集団語が発生する(意味転換)。続いて集団語が「いわゆる」「国会用語で言う」のようなヘッジ表現[15]を伴って使用されるようになる(ヘッジ共起)。さらに集団語が複合語化(「総理入り審議」「テレビ入り審議」「つるし状態」)、サ変動詞化(「お経読みされて」)、受身化(「つるされておる」といったさまざまな文法的發展を遂げるような段階に至る(文脈拡大)。松田(2021)[13]のモデルは、これら4段階が直線的に進行するという主張をしたものであった。

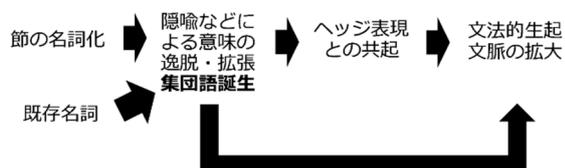


図1 松田(2021)の国会集団語の言語的發展モデル

今回のデータを4段階でプロットしたのが図2~5である。横軸は発言年月日、縦軸はデータの重なりを避けるためにランダムな揺れを入れたものであり、縦方向の位置は無意味であることに注意されたい。集団語により發展段階にばらつきがあり、グラフは「お経読み」「つるし」のように4段階すべて

が観察できるもの、「総理入り」「テレビ入り」のように意味転換と文脈拡大しか観察できないものに大別できる。また、いずれのグラフでも發展段階の順序には前後の揺れが認められる。しかしいずれのグラフにおいても4段階は直線的に進行するというよりも、原義を含む前段階に新たな段階の形式が追加されこれまでの發展形式と共存するというモデルの方が当てはまるということは言えそうである。また、前述のように各段階の移行も截然としたものではなく、時に順序が入れ替わるケースも見られる。さらに意味転換とヘッジ共起の区別は付けがたく、両者はほぼ同時に生起しているものとすべきであろう。以上の点に鑑みて、本稿では図6のモデルを国会集団語の言語的發展モデルとして提案したい。図6のモデルでは「つるし」「お経読み」のようなパターンIと「テレビ入り」「総理入り」のパターンIIを区別していることに注意されたい。

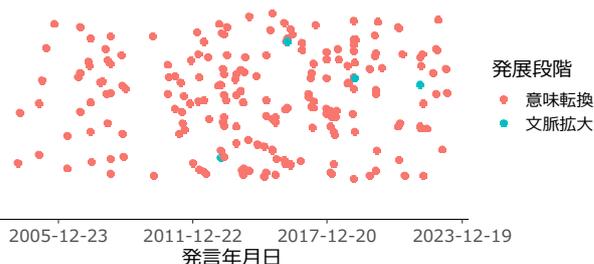


図2 「テレビ入り」の發展段階による分布

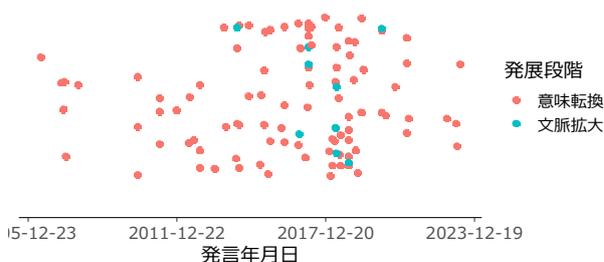


図3 「総理入り」の發展段階による分布

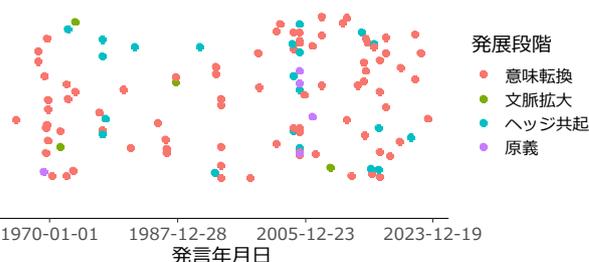


図4 「お経読み」の發展段階による分布

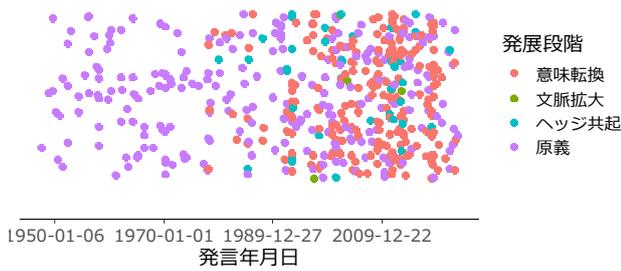
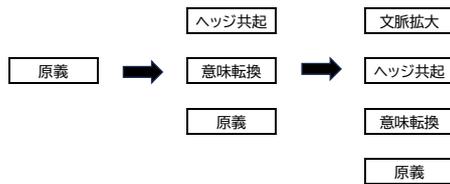


図5 「つるし」の発展段階による分布

パターン I: 名詞からの発展によるもの



パターン II: 節から名詞句へ発展によるもの



図6 国会集団語の言語的發展モデル改訂版

4 社会的發展段階

4.1 政党による分布

§3 で見たような純粹に言語学的形式の發展とは別に、集団語はまた国会という「社会」においても發展を遂げているのであり、そこでの拡散過程が問題となる。ここで国会という場の特色に鑑みると、政党が集団語の發展・拡散に一定に役割を果たしていることが予想される。Matsuda (2020)[14]は国会集団語は政党を単位として拡散することを主張した。これは集団語はまず特定政党Aの所属議員によって使用され、やがて別な政党Bの所属議員が使用するようになり、そして政党Cの所属議員へとという具合に政党ごとに拡散するという仮説である。

本稿ではこの仮説を検証するために、4語の国会集団語について発言者の所属政党によるプロットを作成しその分布状況を検討することとした(図7~10)。なお、所属政党名をそのまま使用するとカテゴリーが多すぎ煩雑となるので、政党名は適当に合併した。また政党性を見るために参考人の発言は除外した。さらに集団語の發展に集中するために原義での使用は除外して集団語として使用されたケースのみをプロットしている。

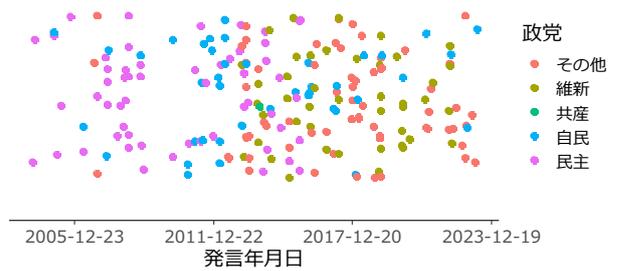


図7 「テレビ入り」の発言者所属政党による分布

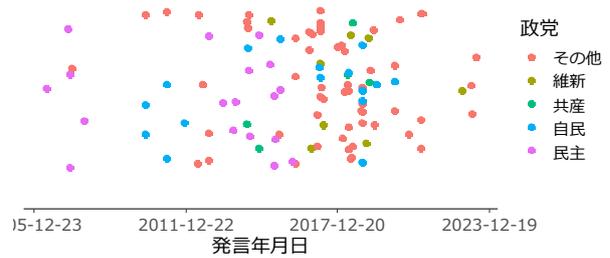


図8 「総理入り」の発言者所属政党による分布

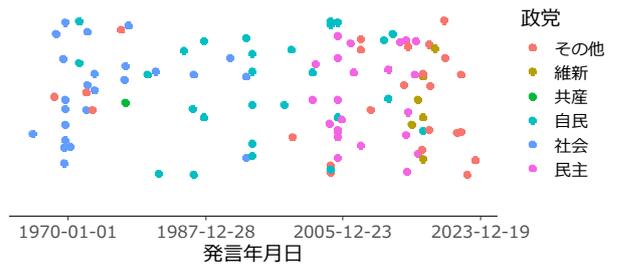


図9 「お経読み」の発言者所属政党による分布

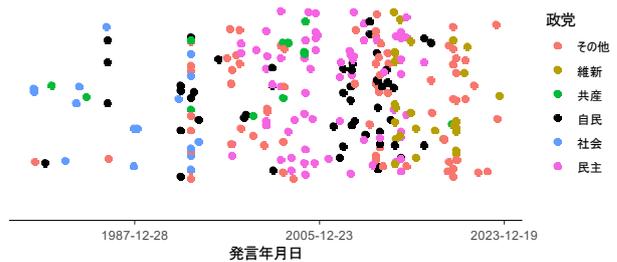


図10 「つるし」の発言者所属政党による分布

これらのプロットを検討すると、国会集団語は単一、もしくは2,3の政党の複数議員によって使われて国会集団語の使用が始まるようである。同一政党の複数議員であることから、個人を単位とする動きではなく、政党単位と見做すことができる。ただし、そこから先の拡散過程となると、明確な政党性を読み取れるものと、そうした傾向性が明らかでないものの2タイプがありそうである。よって Matsuda (2020)[14]の主張である「政党を単位とした伝播」は、

少なくとも始まりはごく少数の政党の所属議員から発するが、その後の拡散は必ずしも政党性に沿ったものとは限らないと修正されるべきである。

4.2 与野党差による分布

政党という区別とは別に、所属政党が時の政権に対して与党なのか野党なのかという区別が集団語使用に関連している可能性も考えられる。今回調査した個々の議員について今回の集団語4語の使用時期に与党所属であったのか野党所属であったのかを調査することは果たせていないが、大まかな分類として、発言時点が自民政権であったか非自民政権であったかを区別し、発言した議員の所属政党との関連を見ることは可能である。これで与野党差の集団語使用への関わりを探る手がかりとなることが期待できる。上掲の図7～10について、非自民政権期間（細川・羽田・村山内閣1993年8月9日～1996年1月11日、鳩山・管・野田内閣2009年9月16日～2013年12月26日）を囲んで示したのが図11～14である。

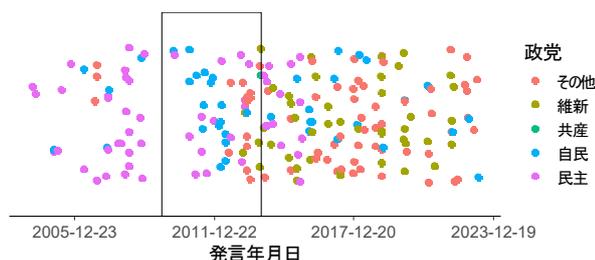


図11 「テレビ入り」の発言者所属政党による分布2

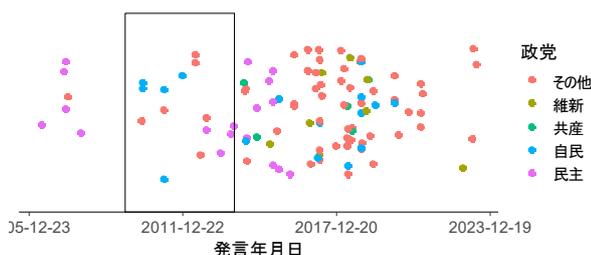


図12 「総理入り」の発言者所属政党による分布2

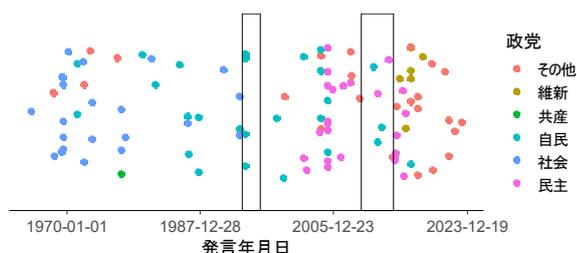


図13 「お経読み」の発言者所属政党による分布2

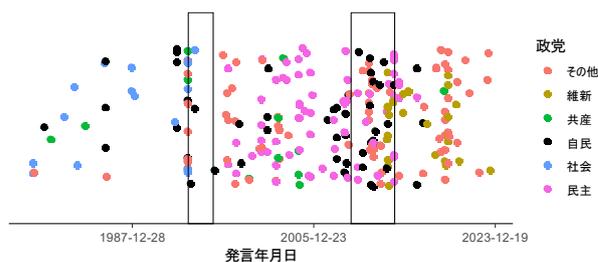


図14 「つるし」の発言者所属政党による分布2

図11～14を検討すると、ごく大まかな傾向として非自民政権下では自民党議員による使用がやや目立つようである、つまり国会集団語は野党議員によって使用される傾向があるわけである。国会集団語は野党の政治戦略の一環として使用される可能性がありそうだが、ここにはさらなる分析が必要である。

5 まとめ

本稿では、4語の国会集団語について国会会議録から抽出したデータによりその発展過程を言語学的観点と社会的観点の両面から明らかにした。議員を始めとする発言者の克明な記録とその大規模性という特色を生かすことにより、従来の集団語研究に欠けていた集団語生成のダイナミズムの一端を明らかにすることが可能になった。

言語学的過程に関しては原義、意味転換、ヘッジ共起、文脈拡大の4段階が直線的に、また截然と断続的に連なるのではなく、新たな形式が追加され旧形式と共存すること、また意味転換とヘッジ共起は区別しがたいことを主張した。

拡散の社会的側面として、単一ないし2,3の政党の複数議員によってその使用が始まるという点で始点段階では政党単位と言えるが、それ以後の拡散については必ずしも政党単位とは言えないことを示した。また、非自民政権下での使用状況を見る限り、国会集団語は主に時の野党議員によって使用される可能性があることを明らかにした。

将来的課題として発言者の肩書き（大臣、議長、委員長、参考人など）の関わり、また集団語の発生時期、頻用時期と当時の政治状況との関わりを指摘したい。例えば今回分析した「つるし」については、1990年代に活発化した国会審議活性化法の審議が大きく関与している可能性が高い。「つるし」の発生はこの時期より遡るが、1990年代の頻用は明らかに同法関連の審議によるものと思われる。こうした政治状況との関わりを明らかにする必要がある。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 22K00582 と 20K00576 の助成を受けたものです。

参考文献

- [1] 米川明彦. 集団語の研究 (上). 東京堂, 2009.
- [2] 柴田武. 集団生活が生むことば. 石黒修・泉井久之助・金田一春彦・柴田武 (編) ことばの講座 第5巻 (現代社会とことば), pp. 88-107. 東京創元社, 1956.
- [3] 柴田武. 「集団語とは」日本放送協会 (編) NHK 国語講座 日本語の常識, pp. 142-185. 宝文館, 1958.
- [4] 渡辺友左. 隠語の世界—集団語へのいざない. 南雲堂, 1981.
- [5] 木村義之・小出美河子. 解説編 木村義之・小出美河子 (編) 隠語大辞典, pp. 1409-1488. 皓星社, 2000.
- [6] 米川明彦. 集団語辞典. 東京堂, 2000.
- [7] 米川明彦. 集団語の研究 (下). 東京堂, 2022.
- [8] 向大野新治. 衆議院—そのシステムとメカニズム. 東信堂, 2002.
- [9] 宮下忠安・小竹雅子. もっと知りたい! 国会ガイド. 岩波書店, 2005.
- [10] 竹中治堅監修・参議院総務委員会調査室 (編). 議会用語事典. 学陽書房, 2009.
- [11] 塩田潮. まるわかり政治語事典—目からうろこの精選 600 語—. 平凡社, 2011.
- [12] 松田謙次郎. 「方言」の飛び交う国会審議. みんなの知らない方言の世界 (2017 年度ワークショップ報告書). 愛知大学人文社会学研究所, 2019.
- [13] 松田謙次郎. 国会集団語の誕生・発達過程に見る逸脱現象. 金澤裕之・川端元子・森篤嗣 (編) 日本語の乱れか変化か—これまでの日本語, これからの日本語, pp. 219-235. ひつじ書房, 2021.
- [14] Matsuda, Kenjiro. The birth and diffusion of group languages in the National Diet. In Asahi Yoshiyuki (ed.) **Proceedings of Methods XVI: Papers from the Sixteenth International Conference on Methods in Dialectology**, pp. 219-227. Peter Lang, 2020.

- [15] Lakoff, George. Hedges: A study in meaning criteria and the logic of fuzzy concepts. **Journal of Philosophical Logic**, Vol. 2, pp. 458–503, 1973.